

巻頭言



滋賀県知事 三日月 大造

地球の未来とつながる滋賀を目指して

私たちが暮らす滋賀県は、日本のほぼ真ん中に位置し、高速道路や鉄道の結節点として周辺からのアクセスに優れています。また、県土の中心に日本最大の湖である琵琶湖を有し、275億トンという豊富な水量を、関西圏1,450万人を支える飲料水と工業用水として供給しています。

私たちは、その琵琶湖をきっかけに、湖がとりもつ縁で、アメリカのミシガン州、ブラジルのリオ・グランデ・ド・スール州、そして中国の湖南省と姉妹友好提携を結び、長年に渡り交流を続けてきました。新型コロナウイルス感染症の拡大によりこれまでのような交流事業はできない事態となりましたが、医療用物資が不足した折には互いに支援物資を寄贈し、「どんなに離れていても心はそばにある」ということを強く感じました。そして、これまでの絆を後退させることなく、交流活動の再開を目指して、この困難を共に乗り越えてまいりたいと思います。

滋賀県では、現在3万人を超える外国人県民の方が生活をされています。そのすべての外国人県民の方が多様性を生かして活躍できる多文化共生の地域社会を目指し、多言語による情報提供や、やさしい日本語の普及、日本語を含む13言語に対応した「しが外国人相談センター」の運営、外国人材受入サポートセンターによる外国人材の受入れと活躍支援などを行っています。また、多言語による各種支援や情報提供、生活支援の充実など、コロナ禍でお困りの外国人県民等の皆様の支援も図っています。今年度は、コロナ禍での支援に加えて、外国人県民等の方が防災について学び、防災意識を向上するための防災イベントの開催や災害時外国人支援のための人材養成を実施することで、災害時に外国人県民等の支援を効果的に行うための体制を整備する取り組みを行っているところです。さらに、安定した日常・社会生活を営むために必要な日本語能力を習得できる学習機会の確保に向け、地域日本語教育の推進計画を策定するなど、外国人県民等の皆様がより安心していきいきと暮らすことができる環境の整備に取り組んでまいります。

グローバル経済への過信や都市一極集中のリスクなど、コロナ危機によって、現代社会が抱える課題が顕在化した一方で、本県の適度な“疎”や自然に恵まれた暮らし、歴史文化の豊かさ、近江商人の「三方よし」の精神など、滋賀の持つ価値が再評価されています。ウィズコロナ・ポストコロナ時代を展望し、危機を転機と捉え、滋賀の強みを伸ばしながら、琵琶湖や地球の未来、次の世代にも目を向け、より良き自治を追求し、本当の意味での「健康しが」、だれもが「幸せ」を実感できる滋賀、「利他のこころ」でもに生きる滋賀をつくってまいりたいと考えています。